

特 集 「編集委員今年の抱負 2009：経糸から横糸まで」

小市民的迷走

矢入(江口)郁子 上智大学理工学部



2年前の拙稿「小市民的知的好奇心とアウトサイダー」に、恐れ多くもメールをお寄せ下さった方がいた。ちょうど第二子の出産入院中で返信の機を逸してしまったことをここに心よりお詫び申し上げたい。さて本稿では、この2年間の矢入の研究の興味の変遷(ある意味、迷走と言っても過言ではない)について触れさせていただきたい。

「自分が根っからの機械屋である」と上記拙稿に書いたのだが、ちょうどその頃、NiCTで新しい中期計画が始まり、それまでの障害者支援のための知的な機器を作る研究から離れ、マネジメントやソフトウェア研究中心の活動を行っていた。やはり心のどこかに満たされない気持ちがあったのだろう、インターネットの次の通信網を白紙から開発することを目指す「新世代ネットワーク研究」の部署への誘いを受け、育児休暇明けと同時に移動した。するとそこは情報系研究者の私にとっては文化からして別世界、研究内容も想像以上にエキサイティングなものだった。

どう別世界だったかという話はさておき、何がエキサイティングだったか、という話を書かせていただきたい。以下は「海外電気通信」という雑誌の2008年春期特別号 pp. 32-50に、新入りながら書かせていただいた解説記事の抜粋である。

「…新世代ネットワークは、重要な社会基盤である通信分野で、電話網・インターネットに続く第三のネットワークを白紙からつくり上げるという、社会に大きな変革を及ぼす、数十年に一度のインパクトの大きい研究テーマである。そして、産業界・学術界双方で研究開発の気運が高まらなければ、個人研究者が白紙から新しいネットワークをつくり出すと唱えていくら研究を進めていても研究の価値が認められにくい時限性の高いテーマなのだ。ちなみに日本で前回同様の気運が高まったのは科学技術白書によると1950年代末くらいから70年代前半にかけてであったようである。つまり、社会を変革する通信基盤を白紙からつくり上げていいよという研究テーマに出会うことは、研究者にとってはもはや運のようなものなのである。…」

欧米では日本に先立ち同様の取組みがなされているが、米国は大学の学術系ネットワークを抑えてインターネットと同様の勝ち方をするための学術系ファンド中心の戦略を、欧州共同体は企業へのマッチングファンド中心に米国のシスコシステムズに代わるような企業を欧州から出そうという戦略を取っているように概観される。日本は二大巨頭にどこまで食い込むか、というところで、欧米が本気な分、日本やほかの国々も本気になっていて、私がいた戦略本部では各国の情報や日本国内の情報が集まっていて、日々のわくわく感はなんともいえぬおもしろ

しさであった。それだけでなく、機械屋として新世代ネットワーク研究のもつ設計科学としてのおもしろさに、いたく知的好奇心が刺激された。あるべきものを追及し、より良く実現しようというのが設計科学の学問としての定義であるが、巨大な社会基盤を白紙からつくるというのは、設計科学の究極のテーマではあろう。つくり上げられる新世代ネットワークだけでなく、数多くの研究開発者達の協力によって巨大なネットワークをどうつくり上げていくのかという過程の詳細な記録・分析もまた重要な学術成果となるはずだ、それを自分は内部から眺め、記録・分析する者になろう、学術論文を書けなくても、などと考えていた。…が、周囲の人々のあまりの忙しさを見るにつけ、2名の幼児に加えて、長期入院中に非常にまれな感染症に罹り、もし治っても介護が必要となるだろう実父を抱えてしまった私は、チームワーク主体のここでの仕事をあきらめ、時間が自由になる転職先を捜すことにした。幸い通勤時間が片道1時間短縮できる大学に職が見つかり退職することになった(その後実父は世を去ってしまったが)。また、私が新世代ネットワークに傾倒するきっかけを与えて下さった上司の平原正樹氏がこの7月に急死された。ご自身もご尊父の闘病サポートのため海外出張の合間を縫って週末に九州に帰省なさっていたため、私の事情にも深くご理解下さった。深く御礼申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈りしたい。

さて転職後、大学の「研究テーマに制限がない」という点が非常に新鮮に映った。着任前に突然催促されたので適当に書いて送った卒論テーマだけを見て、私の顔も知らずに配属を希望してくれた4年生の4人は、なかなかのツワモノ揃いで、接していると正直言って飽きない。以前私に「大学教員もそんなに良い職業ではない、(転職を)早まったらだめだ」とおっしゃった某先生の言葉の意味もこの半年の間になんとも理解できたが、今は4人のツワモノ達と笑顔を交えながら、こつこつと研究をやるのが心から楽しい。授業のほうも準備は大変だが、学生から反応が返ってくると正直おもしろい。

2年にわたった小市民の私の研究への興味に関する迷走が終りを告げるのか、それともより根深い学問的なアイデンティティ捜しの迷宮に入っていくのか、今はよくわからないのが正直なところだ。しかしこの2年、迷走しながら一つだけわかったことは、他人の人生を背負っていない小市民であればこそ迷走も許され、迷走中ならではの出会いや転機が訪れるという幸運もある、ということである。研究予算獲得という制約条件のもと、もうしばし学問的興味の迷走を楽しむことにしようと思う。